

「これからの原子力への教訓」

話題の映画「ミッドナイトイーグル」の原作者である高嶋哲夫氏は、かつて原子力を志した若者だった。稀代の外交ジャーナリスト・手嶋龍一氏と原子力が抱える根源的な課題について、大いに語り合っていた。

高嶋哲夫（作家）

手嶋龍一（外交ジャーナリスト・作家）

希望と挫折

—— 本誌2008年No.1の巻頭を飾らせていただく対談に、手嶋、高嶋両氏を迎え、ワクワクする思いです。高嶋さんは日本原子力研究所（当時）のご出身ですが、どういってお気持ちで入られて、どうしてお辞めになられたのか、その辺のところからお聞かせいただけますでしょうか。

高嶋 僕が原研に入ったのは、もう30年近く前になりますが、その頃は原子力に対して、今ほど厳しい目が向けられてはおらず、未来のエネルギーとして、社会は明るく捉えていたように思います。原子からエネルギーを取り出す方法は二種類あ

ります。核分裂と核融合です。現在実用化されているのは、核分裂による方法で、僕がやっていたのは核融合の方です。大学院のときは、通産省の電子技術総合研究所に通い、θ（シータ）ピンチという核融合の二つの方式を研究していました。その頃、原研のトカマク型核融合実験装置を見学する機会がありました。「地上に太陽を」というキャッチフレーズはすごく魅力的で、まさに人生を捧げるべき仕事だと夢を持って原研に入りました。僕が入った頃、「JT60」という世界最大の核融合装置のR&D（技術開発）がほぼ終わって、建設の第一段階に入ろうかという時期でした。

実際にやりがいのある仕事だったのですが、

若気の至りというか、研究体制に不満も多かったわけです。原研に入る前に二ヶ月ばかり、友達を訪ねて渡米したのですが、その時、アメリカの大学を見学して世界でやってみたいという気持ちが非常に強くなっていました。それで、思い切って原研を辞めてUCLAに行つたわけです。ところが、英語力の不足もさることながら、肝心の専門分野のほうにも自信をなくしてしまつた。自分自身の目標設定が高かつたせいかも知れませんが、完全に挫折してしまいました。「このままアメリカで研究者としてやっていけるだろうか」とかなり悩みました。

ちょうどその頃、周りに作家志望の人が何人かいて、彼らと付き合ううちにな

ちの方が向いているのではないか、と思うようになりました。そして作家に転向したわけです。ただ、二十代半ばまでかなり必死でやってきた科学の勉強をムダにはしたくなかつたし、ムダにはなっていないと思っています。僕の書く小説には科学者が多く出てきますし、原子力関係のものも多いです。そして、無意識のうちに論理的思考やデータを見ることにも役に立っていると思つています。でも、今でも最先端の科学記事を読んだり、自分の研究を熱く語る科学者を見ると羨ましく思います。

手嶋 原子力からの転身について、もう少し詳しくお聞きしたいと思います。その前に一般の読者にもわかりやすく、核分裂と核融合の違いをご解説いただけますか。

高嶋 重い原子を二つの原子に分けることによって、エネルギーをつくり出すのが核分裂で、逆に軽い原子をくっつけてエネルギーを取り出すのが核融合です。現在、実用化されている原子炉はウランなど重い原子を燃料とする核分裂反応によるものです。しかし、ウランの埋蔵量は意外と少なく、百年弱と試算されています。このウラン燃料とプルトニウムを混ぜたMOX燃料を使用するプルサーマルという方式を採用すると、それが何倍にもなります。そして高速増殖炉が実用化されるとさらに伸びます。高速増殖炉というのは、使用した燃料以上の燃料を生み出



手嶋龍一 (外交ジャーナリスト・作家)
元NHKワシントン支局長。これまで日本にはなかったインテリジェンス小説という新たな分野を切り開く。『ウルトラダラー』をはじめ、著書は軒並みベストセラーになる。

すという、まさに夢の原子炉です。

核融合の燃料は海水から取り出される重水素ですから、ほぼ無尽蔵に存在している。でも、実用化されるにはまだかなりの時間がかかります。ですから、その中間点として自然エネルギーなどの新しいエネルギーを開発するというのも非常に重要なことです。それは風力であり、太陽光であり、バイオマスであるわけですが、ただ、それらに全てを代替させるということとはあまりにも今の段階では量的に少なく、現実的ではありません。したがって、その方向も研究しつつ、100年先、200年先のことを考えた核融合の研究を重ねていく必要があると思っています。

手嶋 核分裂はイメージがつかめませんが、核融合についても一般の方々のイメージが沸き立つように説明していただくと助かります。

高嶋 要するに、太陽と同じような反応を人工的に作り出すということです。



高嶋哲夫 (作家)
日本推理作家協会、日本文芸家協会、日本文芸家クラブ会員。『M8』、『TSUNAMI』(集英社)、『イントゥルダター』、『ミッドナイトイーグル』(文藝春秋)など著書多数

水素爆弾というのは、一瞬核融合反応なんです。ただ、瞬間的な爆発で制御などできません。それをコントロールできる反応にして、エネルギーを取り出しているということなんです。もともと身近なものでいうと、蛍光灯です。あれをもっと高密度、高温にして、コントロールしながらエネルギーを取り出していく。それが核融合です。

手嶋 高嶋さんにぜひ伺いたいと思うていたのですが、かつては夢を持って原子力の世界に飛び込んだ若者がいた日本も、いまでは大学ですら原子力の名称を持つ学科があらかた消えてしまいました。「夢を持っていた時代」と「原子力という名前さえ消し去った時代」の落差はどうしたことでしよう。「夢を持っていた時代」に生きていた高嶋さんは、こうした現状をどう捉えているのでしょうか。

高嶋 原子力の衰退とは言いたくはありませんが、確かにここ何年もの間、多くの国で原発建設は実質凍結の状態にあり

ます。それには、いくつか理由はあります。第一には、石油が非常に安定的に、かつ量的に十分供給されていたということですね。それに、値段も高くはなかった。そのため、原子力に対してそれほど依存する必要がなかったということです。

手嶋 やがて忍び寄る危機に備えておくことこそ、安全保障の心構えだと思うのですが、とりわけ日本のように石油に深く依存する国にとっては。

高嶋 そうですね。それに1986年のチェルノブイリと1979年のスリーマイル島の出来事です。この二つの事故が原子力に対するイメージを一変させてしまいました。日本では1999年のJCO臨界事故が衝撃的でした。原子力はなくてもいいのではないかと、いや、なくてもやっていける、という考え方がすごく強くなりまして。ところが最近では、地球温暖化の問題だとか、原油価格が非常に高騰していることから、アメリカでも、あるいはドイツなど一時原子力建設を中止していた国でも、再び見直されています。

手嶋 いま明らかに世界的な規模で、原子力政策の大転換が進んでいます。原子力離れを起こしていた先進国の間で見直しの機運が高まっています。日本は石油に依存しすぎていたエネルギー政策に適度のバランスを持たせる狙いもあって、欧米各国が原子力離れを起こしていた時も、

原子力発電を中止しませんでした。しかしその日本ですら、東大から原子力関係の学科が消滅してしまっただけで、やはり一種の空洞化が起きていたと言えましょう。

しかし今、日本と世界の経済は、未曾有の原油高に見舞われています。そこで原子力発電の意義を再認識するというのでは、あまりに他律的です。高嶋さんは、作家として、またかつて原子力産業におられた人として、こうした現状をどんな風に見ておられますか。原子力産業に身を置く人々の、過去20年の間に何が起ったのかをお話いただきたいと思っています。

高嶋 内部と言いましても、僕が知っているのは産業ではなくて研究サイドの方です。研究者は外部事情とは無関係に、原子力に対して非常に真摯に研究を続けています。しかし、経済的な面にはあまり興味がないように思います。原子力の置かれている状況を全体的に捉える場合は、研究の立場と商業的な立場の両面から見る必要があると思います。原子力発電所を運営している電力会社は、やはりコストのことを考えます。すると、例えば定期点検にしても経済面を重視するあまり、人的ミスにつながったり、データの改ざんが行われてしまったのだと思います。実際、最近になって過去の大きな問題がポロポロと出てきています。さらに、日本の原子

力政策には大きな間違いがあった。つまり、スタート時に「原子力は絶対安全だ」という表現から始まってしまった。これは原発の現場で働いている者にとっては、かなりプレッシャーであったと思います。

技術論的な考え方を前提に言つと、100%完全な技術なんてありません。原子力についても、何か事故が起きれば、「停める」、「次に「冷やす」、「閉じ込める」ということができれば外部に対して問題は無い。だから、そういう事態が起ることを前提と言つと言い過ぎですが、それに対する防御策は何重にも取っているわけです。だから、「技術には絶対はない。だからこそこういう防御策を講じている」と丁寧に説明すべきだったのでしょね。

高いハードル

手嶋 高嶋さんはいま、非常に重要なことを明晰に指摘された。日本は唯一の被ばく国であるという事情を抱えながら、原子力発電を手がけてきました。そして石油危機の教訓を踏まえてエネルギー供給の有力な選択肢としてきました。ただ、原子力という選択肢を日本社会に根付かせる過程で重大な間違いを犯してしまつた。「原子力は安全であるべきだ」。これには誰も異存はありません。しかし「安全であるべきだ」ということ、現に「安全であるこ

とは別なのです。「あるべきだ」を「安全だ」と言い換えてしまつていて。日本の原子力業界が自ら非常に高いハードルを設定してしまつていて。そうしなければ、立地が進まなかつた事情は理解できます。しかし、「安全神話」を作つてしまつてはいけません。

今回の柏崎刈羽原発の事故にはいくつかわる重大な反省点があります。特に社会とコミュニケーションを図るという点では、抜本的な改革が必要です。ただ、世界の原子力のプロフェッショナルたちは、あれだけの地震に見舞われてもなお、原子炉の安全を巡る基本機能はよく保たれたと評価しています。すなわち「原子炉を停める、冷やす、閉じ込める」という点ではその機能をよく果たしています。ところが、その点が過小評価されている。というのも、出発点で、あまりに完璧な安全のイメージを自ら作り上げてしまつたからではないでしょうか。それゆえにメディアからことごとく非難を受け、その果てに志のある若者や研究者は、原子力分野にはもう関わりたくないと考え、それがまた現場に跳ね返つてしまつた。こうした負のスパイラルに陥つてしまつてはいないでしょうか。

高嶋 現在、僕は日本原子力研究開発機構(旧日本原子力研究所)の広報委員をやっています。その関係で、原子力関連施設の近くに住む方たちと話をする機会があります。今世界では400基(20

06年末で429基ぐらいの原発が運転されていますが、日本はそのうちの約13%、55基を持っています。世界の中でも、日本の原発のレベルはかなり高い、という話をしていきます。

手嶋 高嶋さんが二点目として指摘されたようにスリーマイル島、チェルノブイリ事故という巨大な災害に超大国は見舞われました。これによつてもたらされた「原子力冬の時代」にあつても、日本は原子力産業を守り育ててきました。そうした国は、G8では日本とフランスぐらいではないでしょうか。

高嶋 ええ、フランスはドイツ

をはじめ、ヨーロッパ各国に電力を売つていくという事情から、日本はやはり資源



▲これから青森県六ヶ所村では、核融合の将来への幅広いアプローチ活動が行われる。(日本原子力研究開発機構青森研究開発センターにて。2007年6月1日)

不足という意味で原発に頼らざるを得ません。それにアメリカも潜在力は高い。日本の原発をつくる上で、基本的なことはほとんどアメリカの技術に依存していました。

今後、資源、環境問題から、中国、インド、ベトナム、タイといった発展途上国が建設を予定している原発はかなりの数にのぼります。ロシアなども40基を予定していると聞いています。はつきり言うて、これは怖い。特に中国なんか、粗製乱造でつくり始めると、事故が起ころりスクは高まりますし、そうなったら日本の被害は計り知れない。そういったことを考えると、日本の技術をそれらの国々に輸出していくことが、結果的には日本にとつても世界にとつてもいい。そして、その方向に進んでいます。

手嶋 そうした趨勢と共に、「核関連技術の拡散」という深刻な危機に世界は直面しています。新しい年、2008年の洞爺湖サミットでも、環境問題、アフリカ問題と並んで核の拡散防止が三本柱に位置づけられています。2007年の9月、イスラエル軍がアラブ強硬派の一角を占めるシリア国内の核関連施設に大規模な空爆を敢行しました。イスラエルの情報当局は、北朝鮮の核関連技術が、シリア産の小麦とバーターで供与されたと断じています。日本は、こ

うした核の拡散を防止する分野でも、主導的な役割を果たしていくべきでしょう。

核の拡散を防ぐ、また核の廃棄という分野で、日本が世界の先導者たりうるとなれば、若い人たちも原子力産業に戻ってくる可能性があるように思います。現に一部では原子力関連の学科を新たに作る動きが福井大学などに出ています。原発を多く抱えている福井県が新たな原子力の先導的技術を担い、世界に向けて発信する役割を果たそうとしています。日本がそうした先進的な技術を輸出するのであれば、核兵器の製造には結びつかない。それは世界が認めるところです。

それと同時にもう一つは、すでに寿命を終えつつある原子炉に、どういつうに安全に死を迎えてもらうのか。原子炉の安楽死問題が非常に重要です。そのための技術も、日本は潜在的に高いものを持っています。福井県の新しい大学院に課せられた新しい任務の一つになるのでしょうか。そういう新たな目標を設けない限り、この分野にいい人材はもはや集まりません。

技術の継承

高嶋 技術の継承はすごく重大なこと

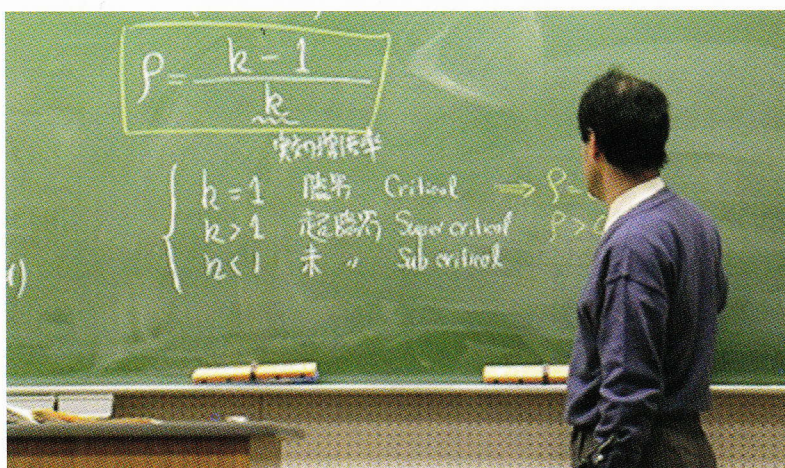
で、原子力の冬の時代というのは、日本にとつて、というより世界にとつて非常に大きなマイナスだったと思います。例えば、「もんじゅ」です。僕は二度ほど行ったことがありますが、この研究者、技術者の方は非常に気の毒でした。あの事故以来、すべてが実質ストップしています。10年以上も研究が止まってしまったら、やはり研究者、技術者としては致命的と言わざるを得ません。ただ、彼らは広報、研修などでずっと頑張っておられました。まったく、頭の下がる思いです。

手嶋 原子力に関わる人々の使命は重大です。自由民主党内には「核武装を巡る議論は大いにすべきだ」という人がいます。それは将来の核オプションを論じることに通じています。私の意見は異なります。日本は、広島、長崎の惨禍を体験し、それゆえに核保有の潜在能力を十分に持つていながら非核保有国であり続けています。こうした日本こそ、世界の2000近い非核保有国を代表する資格をもっています。それだけに国連の安保理で、拒否権をもつ常任理事国として遇されるべきでしょう。日本は、非核保有国の先導者として大切な責務を担うべきなのです。

高嶋さんの指摘のように、世界はいま再び原子力というエネルギーを必要としつつあります。原発から距離を置いて

きたドイツですら、原子力政策の見直しに取り組みつつあります。日本はいまこそ、原子力の平和利用の分野で真のリーダー役を果たすときだと思います。そうすれば日本の有為な若者が、この分野に戻ってくると思います。

そうした時代を呼び寄せるために、いくつかの改革を進めなければなりません。従来は過疎地に原発をつくることで、中央からお金を流し込んでいました。一種の所得再分配をしていたわけです。しか



▶ 原子力を担う人材の輩出に向けて、福井大学では新しい取り組みが始まった

く、それが一番だと思います。

“ミッドナイトイーグル”を書く

し、そんな時代は終わりを告げています。地元も、原子力業界も、そして自治体も心すべきでしょう。福井県などでは、原子力発電所だけを安易に押し付けられるのはもう嫌だという空気が支配的です。原子力発電所や核燃料サイクルと共に、次世代を拓く原子力関連の研究機関、つまり原子力開発の頭脳部分を地方にという声が強まっています。そういう新しい時代が到来しているという認識が果たして関係の機関や自治体、そして電力業界にあるのでしょうか。公共事業に従来見られたような一種のばら撒きの発想からまだ抜け切れていないのではないのでしょうか。

手嶋 高嶋さんの作品を映画化した「ミッドナイトイーグル」がいま全国で上映されています。「ミッドナイトイーグル」にも、核が大きな影を落としています。が、どのようにして着想を育てて、この作品が世に出たのでしょうか。

高嶋 この作品を書いたのは10年近く前です。その頃にわりと話題になっていたようなことを、自分の専門に結びつけて書きたいと思っていました。それが一番楽だし、確実です。全体の大まかなイメージがあつて、細部は書き進めるうちに少しずつ決まってくるという感じです。

手嶋 でも、テーマが熟成する期間はあつたのだと思います。実際に書き始めるまでの助走の期間ということでは、高嶋さん

んはどんなタイプに属する書き手なのでしょう。

高嶋 僕は長い場合と短い場合があるんです。

手嶋 「ミッドナイトイーグル」はどうでしたか？

高嶋 短かつたと思います。「イントルーダー」でサントリーミステリー大賞をいただきましたが、受賞した場合の次作を書いておかないとダメだというので準備していたものでした。ですから、着想という意味では数ヶ月でした。ただ、東京の直下型巨大地震を扱った「M8」は長かつたですよ。僕自身が阪神・淡路大震災を経験し、これは書かないとダメだという強い思いがあつたので、資料は地震当時から集めていました。でも、実際に書き始めるまでに十年近くかかっています。それはテーマが非常に重かつたからで、実際に悲惨な状況を目のあたりにしていたし、周りにも亡くなつた方とか家がつぶれた方がいましたからね。これは軽率に書くことはできないという思いがありました。編集者の方に、10年目にはちゃんと出したほうがいいんじゃないですかと言われて書き始めました。それ以上はばすと、書けるかどうか僕にも分からなくなつて。書き始めてから書き終わるまで半年ぐらいいかりました。ですからテーマによつて違います。

小説を書くということは、煎じ詰めれば人間を書くことだと言われたことがあります。いろんなストーリーがありまがすが、その中で人間がどう考え、どう行動するかが興味を持たれるということだと思っています。ですから、こういう人間像を書きたいと浮かんた場合に、それをうまく動かしていくには、自分が一番よく知っていて、かつ他の人たちが興味を持つてくれそうな分野を扱うのがベストであると思います。

ただ、僕の場合、書きたいことは、どうも「事件」の方にあるようです。それが、核爆弾であり原発つてことになつてしまふ。そう今では思っています。少々、矛盾しているかも知れませんが。

危機管理を常に

——今お話のあつた「M8」は巨大地震がテーマでしたが、現実には柏崎刈羽原発が中越沖地震に見舞われました。高嶋さんがこういう作品をお書きになられ、地震の問題等を含めた国家の危機管理という問題をどのように考えておられるのか、ぜひお聞かせいただければありがたいです。

高嶋 実をいうと、僕は「M8」に関しては、危機管理について書いているとは思っていませんでした。書き上げてか

ら、周りの人たちに危機管理と結びつけて意見を聞かれることが結構多くて、自分でもそういうことかなと驚いています(笑)。小説は読んでただ面白いのではなく、啓蒙の役割も重要だと思い始めました。

ただ、地震もそうですが日本は災害大国なんですね。そういう地殻構造の上に乗っているわけだし、位置的にも毎年大きな台風が通り過ぎる道筋にある。ですから自然災害の場合、危機管理の問題として捉えるより、むしろ必ず起こる行事的なものと考えるべきだと思っています。例えば、家の耐震化にかかる費用を保険と考えると、もったいないかなと躊躇する人もいますが、必要経費だと考えると出さざるを得ないでしょう。河川の堤防を補強したり、建築物の強度強化は、災害復興費用を考えると安いものです。

手嶋 沖縄や奄美の方々は、台風が来るっていうのは、まさに歳時記の一つになっています。必ず来るわけで、それを日々の暮らしに折り込んで家も建ててきたのでしょうか。今度の柏崎刈羽原発についても、こうした事態はありうるという前提に立って、様々な備えをしておくべきでした。安全神話を作り上げてはいけません。その点で原子力産業に携わる側も、重大な反省点を抱えていると思います。

ます。

高嶋 いろんな言い方があると思います。「やっぱり問題が起ったか」という言い方もできますし、「日本の原発の管理がちゃんとしているから、あの程度で済んだ」という言い方もできます。僕は後者の言葉がある意味正しいと思っています。事実、IAEAの調査でも、「原発は安全に停止し、損傷は予想を下回った」と報告しています。ただ、やはり対応がまずかったというのは大いに反省すべきです。それは先ほども言ったように出発点に問題があります。手嶋さんがおっしゃったように、ハードルが高いということです。そういったことを理解した上で、メディアの方も「原発が悪い。また隠していたか」ということばかりを強調する書き方ではなく、正確な情報を正確な言葉で伝えてもらいたかったということは言えますね。

手嶋 メディアの報道のあり方も問われなければいけない。地震も、原発事故も、起きないほうがいい。にも関わらず、われわれは、事故や災害と隣り合わせに暮らしています。ところが事故や災害が特別な事態だという前提に立ってしまえば、非常事態に遭遇して、社会もメディアも冷静さを失いがちとなります。地震が原発を襲った場合には、メディアは、原発の心臓部が速やかに停止するかどうかを正確に冷静に報じなければなりません。その一方で、原子炉を管理・運営する側も、地域社会とのコミュニケーションに十分な時間をかけなければならぬのだと思います。

私はジャーナリストなので厳しく言っているのですが、世の中との対話では、原子力業界は決して十分だったとはいえないでしょう。メディアの側にも行き過ぎはあるのですが、対話の至らなさをメディアの過剰な報道のせいにしては、今後の教訓に生かされません。

高嶋 そうだと思っていますね。それから電力関係者と話をしていると感じるのは、非常に萎縮しているということです。だから、「もつと言いたいことを主張してもいいんじゃないですか。多少の喧嘩は覚悟して」と言っていると、喧嘩なんてしたら、大変なことになると言っておられます。しかし誰かが、柏崎刈羽原発のことでも、「原子炉関係の事故は起こっていないじゃないか」と言い切ってもいいように思いますけどね。これは、僕が第三者だから言えるのでしょうか。

原子力は、「技術」、「行政」、「人」がバランスよく前進して、初めて安全かつ有意義な方向に向かうと思います。このうち、技術はわりとうまくいっていると思いますが、行政と人がまだかなり遅れています。

——人というのは、事業者の人ということですか。

高嶋 事業者も含めて、原子力に関わる人全員です。例えば、亡くなった方たちのことは言いづらいのですが、JCOで働いていた作業員の方は、やはりかなり無茶なことをやりました。少しでも原子力の知識を持っていれば、絶対にやらない行為です。今まで起こった事故は人為的な事故が多いですね。一般の方も、原子力を本当に理解しようという人は少ないと思います。基礎知識に関しては、本気で勉強すればそんなにむずかしいことではない。そういうことを含めて、みんな2000年、2000年先を見つめた長い歩みとして考えていくべきではないかなと思います。

語り部を育てる

——人為的な事故という話が出たので、「ヒューマンエラー」についてお聞きしたいと思います。人間の意識の介在を許さず、無意識下で起きてしまうことが「ヒューマンエラー」だと定義されていると思うのですが、かなり誤解をもつて受け止めておられる方も多いと思います。どうすればこれを皆さんに理解していただけるのか、どういうふうに説明すれば理解していただけるのでしょうか。

◀ 2007年11月から全国でロードショーが始まり、大ヒットとなる。(C)「ミッドナイトイーグル」パートナーズ

日本版「カウントダウン」が始まったあと48時間狂吹雪の北アルプスで、男たちは命を懸けた脱するひとを導く。ただ、そのためにだけ。

もう、誰も失いたくない。



高嶋 それは非常にむずかしい問題ですね。日本みたいに経験と訓練で全て片がつくというような考え方はなくて、例えば心理学者のような人を入れて、もつと科学的、システマ的に考えたヒューマンエラーへの対策、手順を作り上げることが、まずは必要です。ヒューマンエラーをカバーする技術の導入もやってはいませんが、完全にカバーすることは非常にむずかしい。

—— 行政についてももう少し詳しくお話を。

高嶋 行政も最初が間違っていたと思います。「原子力は専門家しか分からない

いむずかしいものであり、絶対安全なんだから、住民はがたがた言うな」的な対応があつたのではないかとということ、お金で全てを解決していかうという姿勢があつたことも否めない。やはり日本の将来を考えると、原子力は重要な産業、技術であるとして、人も含めて育てていってほしいと思います。日本の技術と技術者が世界を救う、というべき気概を持つて。

手嶋 行政の側もふだんは電力会社と共同歩調をとっているように見せておきながら、一旦事故が起こったらスツと体をかわして、電力会社を一方的に指弾

するというのがあつては、相互の信頼関係が崩れてしまいます。日ごろから、どのようにして、相互の信頼関係を構築するか。原子力産業、自治体、メディアが、大学などの機関に集まって、災害時の対応のあり方を総合的に研究し、議論を深めておくことは重要です。さらに、原子力を巡る国際環境の変化についても、日ごろから研鑽を重ねておかなければならぬでしょう。かつてカーター民主党政権の出現で、アメリカの原子力政策が大きく転換したことがありました。この政策転換の中心にいたのが、ジョセフ・ナイさんというハーバード大学の教授でした。この人が政権に参加したことで、核燃料サイクルをめぐる政策は一変してしまつた。いくら国内で政策が完結していても、ひとたび国際情勢が変わつてしまえば、大きな影響を蒙ります。

—— 原子力の問題についてモノを申す時、俯瞰的に大所高所から見えてお話しすることはもちろん大切なんでしょうけれども、原子力の問題を伝えていく人間というのは、問題を低く遠く見渡していかなければいけないのではないのか、と思つています。いかがでしょうか。

手嶋 やはり、原子力業界の方々が「安全であるべきだ」という議論を、いつの間にか、「安全だ」という議論にしてしまつた責任は大きいと思つています。原子力

のような先端的な技術分野では、世の中から信頼されている語り部が、どうしても必要です。そんな語り部を日本では育ててこなかったのではないのでしょうか。

私は外交のジャーナリストとしての仕事をしていますが、自分の記事を読んでくださる方にのみに忠誠を誓っていたと思います。原子力についての語り部も一般の人々へのみ忠誠を誓うべきでしょう。

原子力業界や自治体のほうに眼が向いては、その語り部への信頼感は生まれません。イギリスには旅行作家という職が独立した形であるのですが、読者から尊敬されています。日本では真の旅行作家は果たしているのかどうか。なぜならホテルやレストランとタイアップしているケースが多いからです。ホテルに泊まつてホテルのことを書いていても、両者のタイアップなら記事に信憑性は生まれてきません。読者にのみ忠誠を誓うための基礎条件を欠いています。日本の原子力産業のためにも、一般の市民にのみ忠誠を誓う真の語り部の出現が望まれます。

高嶋 僕は最初から作家を目指していたわけではないので、出版社や出版界の常識や事情など考えたこともありませんでした。そのために、いろいろトラブルがあつて。(笑)。

—— どうもありがとうございました。